

## 地域住民の歴史都市に対するコンセプト形成に関する研究

A Phenomenological Study on Planning Process for  
Why Neighborhood Emerge and Succeed /Reawake Regional Concept?

城月雅大<sup>1</sup>・大槻知史<sup>2</sup>・吉本宜史<sup>3</sup>・熊澤輝一<sup>4</sup>・水田哲生<sup>5</sup>・鐘ヶ江秀彦<sup>6</sup>

Masahiro Shirotsuki, Satoshi Otsuki, Takashi Yoshimoto, Terukazu Kumazawa, Tetsuo Mizuta,  
Hidehiko Kanegae

<sup>1</sup>立命館大学大学院政策科学研究科博士後期課程・COE 推進機構 RA (〒603-8341 京都市北区小松原北町 58)  
Ph.D. Candidate, Graduate School of Policy Science, Ritsumeikan University

<sup>2</sup>立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラル・フェロー (〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1)  
Post Doctoral Fellow, The Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University

<sup>3</sup>株式会社森精機製作所八王子テクニカルセンタ (〒192-0081 東京都八王子市横山町 25 番 6 号)  
Hachioji Technical Center, MORI SEIKI CO., LTD.

<sup>4</sup>立命館大学歴史都市防災研究センター客員研究員 (〒603-8341 京都市北区小松原北町 58)  
Visiting Researcher, Research Center for Disaster Mitigation of Urban Cultural Heritage

<sup>5</sup>立命館大学 COE 推進機構ポストドクトラル・フェロー (〒603-8341 京都市北区小松原北町 58)  
Post Doctoral Fellow, 21<sup>st</sup> Century Center of Excellence Organization

<sup>6</sup>立命館大学政策科学部・大学院政策科学研究科教授 (〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1)  
Professor, College and Graduate School of Policy Science, Ritsumeikan University

This study aims to make clear residents' recognition mechanism toward cultural heritages from a perspective of personal identity which is a key element of regional concept by the verification of "Regional Concept Model" and extracted physical and informatic contents of regional concept in Kamishichiken area in Kyoto City. This paper verified properness of the model and confirmed that large majority of residents recognized Kitano-Tenmangu shrine as the symbol of this region and identified as their own identity instead of Senbon-Shakado shrine which is registered as a national property.

**Keywords:** Regional Concept, Place Identity, Historical City

### 1. 研究の背景

現在、世界有数の歴史都市として年間約 4700 万人<sup>1)</sup>もの観光客を集める京都市は 1869 年(明治 2 年)に首都が東京に移転するまで、わが国の政治・経済の中心として繁栄してきた。それ以前の京都は紛れもなくわが国の首都であったが、現在では「歴史都市」あるいは「古都」としてコンセプトが付け替えられ認知・共有されている。

では、東京遷都(奠都)以前の京都の首都性を表象していたコンセプトとは何だろうか。おそらくそれは、わが国の国家シンボルとしての天皇の存在であり、政治機能という非物理的な情報である。確かに、皇居であった京都御所や將軍の宿所であった二条城など、首都時の京都に存在した主要な建築物は今でも現存しているが、首都性としてのコンセプトは喪失している。その一方で、奈良県奈良市・大和郡山市周辺に建設されていた平城京(A.D.745-784)は、その中心的建築物であった大極殿(現在、第一次大極殿正殿の復原整備中)が 740 年の遷都の際に取り壊され、その後、一時再建されたが平安時代中後期から焼亡を繰り返し、中世期には廃絶、物理的な消滅とともに情報としての

首都性のコンセプトは完全に喪失している。また 2001 年には、アフガニスタンのバーミヤン遺跡において、タリバンによって世界遺産登録されているバーミヤン遺跡群のうちの二体の大仏が意図的に破壊された。これらの例を挙げるまでもなく、都市のコンセプトはそのコアとなる情報が遷都や紛争などの人工的な外力によって失われることも、また、自然災害などの自然外力による物理的破壊によっても失われるリスクを持っている。

現在、歴史都市京都を保全し、次世代へと継承していこうとする取り組みが活発化してきている。その一方で、災害多発国である日本において、文化遺産とされるものすべてを半永久的に保全・継承していくことは技術的にも物理的また財政的にも極めて困難である。

文化遺産であるから保全していかなければならないという規範論が論説やマスコミなどに散見されるが、残念ながらそれを支持する世界的な合意は形成されていない。文化遺産の価値は、その建築年代や工法が歴史なものであることや、相対的希少性のみによって決定されるものではなく、その受益者であり維持コストの負担者たる国民がそれら文化遺産に接し、当時の文化的コンセプトの価値を自らの生にとって必要であると感じればこそ、文化遺産を保全する根拠となるのである。

したがって、京都の中には史跡指定されたものや重要であるとされているものの中にも、文化遺産としてのコンセプトの寿命を失っているものも多くあるだろう。東南海・南海地震が極めて高い確率でこの数十年のうちに発生するだろうと考えられている現在、限られた資源と時間の中で歴史都市京都としてのコンセプトを保全するために、何を優先的に保全していくべきかという政策的プライオリティ決定の時期に来ている。そのためには、市民が現在の京都の文化遺産の対してどのような価値を置いて、自らにとって必要だと感じているのか、その構造を明らかにすることが喫緊の課題となっている。

## 2. 研究の目的と構成

本研究では京都市上京区上七軒地区を事例として、地域住民の自己アイデンティティ形成の観点から、文化遺産に対する認知プロセスを明らかにし、個人によって重要視されている地域コンセプトの構成要件を抽出することを通じて、当該地域における保全対象を明らかにすると同時に、その合意形成のための基本的知見を獲得することを目的とした。

そのために、まず地域住民の自己アイデンティティ形成に基づいた地域コンセプトモデルを空間認知プロセスの観点から設計し、京都市上京区上七軒地区を事例として、当該モデルを通じた地域コンセプトの形成プロセスを以下の手順で検証した。モデルの構造の詳細な説明については次章に譲るが、本モデルは、計画情報論的観点から地域を構成する人々の意識内の空間認知における各地域エレメント(地域・地域イメージ・地域シンボル)の関係をボトムアップ構造的に捉え、描写を試みたものである<sup>1)</sup>。そこで、本研究では、(1)地域と地域イメージ間の相関性の検証、(2)地域イメージと地域シンボルとの相関性の検証、(3)地域シンボルの自己アイデンティティ強度に対する影響度の検証、(4)地域コンセプトを形成する要素としての地域エレメントの抽出を試みた。

## 3. 地域コンセプト形成モデルの設計

### (1) モデル設計の枠組み

地域住民の意識内部における空間情報の処理プロセスに焦点を当てた地域コンセプト形成モデル(図 1)を設計した。本研究で用いる地域コンセプトモデルは、城月・鐘ヶ江ほか(2005)<sup>2)</sup>によって提案されたプロトタイプモデルをもとに、追加調査の結果を踏まえて若干の修正を行ったものであり、ここでのモデル提示は構造の手続き的な再確認に加え、プロトタイプモデルでは扱わなかった地域コンセプトの抽出を主な目的としている。

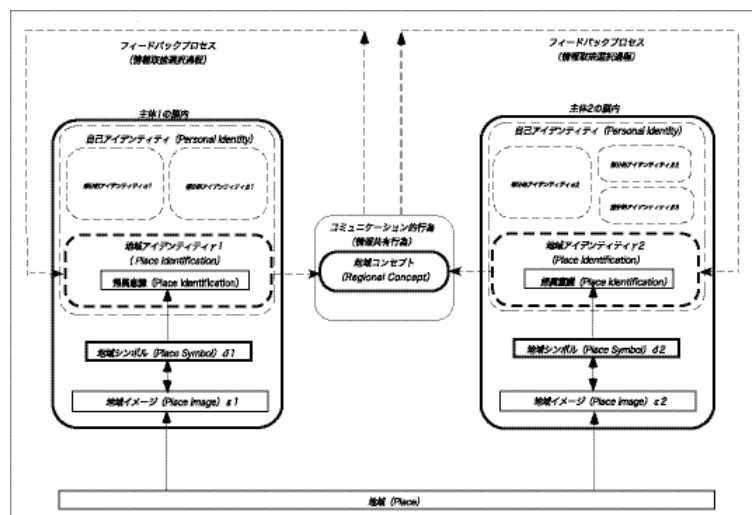


図 1：地域コンセプト形成モデル

各要素の概念定義は以下の通りである。

**(a) 地域 (Place:  $\eta$ ) :**

小学校区(翔鸞学区)と定義した。

**(b) 地域イメージ (Place Image:  $\zeta$ ) :**

主体の客体に対する情報であり、かつ、ある一定水準以上の割合で一般的に認知・共有されている集合的な心象として定義した。

**(c) 地域シンボル (Place Symbol:  $\varepsilon$ ) :**

一定の”地域”の範囲内で、両義的な意味作用を持つ記号として主体に認識されているものと定義した。

**(d) 帰属意識 (Place Identification:  $\delta$ ) :**

常態的・非常態的を問わず、ある主体がある一定の地域に居住していると自覚し、その地域の規範・価値観を共有することによって形成される意識と定義した。

**(e) 自己アイデンティティ (Personal Identity:  $\gamma$ ) :**

ある一定の社会的・文化的基盤に依拠することによって形成された“自己像”であり、それに対する時間的連続性、他者の承認行為、そして継続的な自己確認プロセスを条件として兼ね備えているものと定義した。

**(f) 地域コンセプト (Regional Concept) :**

個々人が持つ帰属意識のうち、他者とのインタラクションによって取捨選択された多主体によって共有された地域像であると定義した。

まず、主体の認識への作用方向から捉えた場合、地域( $\eta$ )が地域イメージ( $\zeta$ )の形成基盤として機能する。後述するように、地域イメージ( $\zeta$ )は地域の実態を反映して形成される心象である。その時点では、非言語的な意識内情報であり、それを表象する存在が地域シンボル( $\varepsilon$ )である(逆に、地域シンボルを介して地域イメージを想起することも当然考えられる)。その地域シンボル( $\varepsilon$ )が主体の帰属意識( $\delta$ )の被写体として機能することで地域コンセプト( $\gamma$ )が形成される。

次いで、主体内において形成された地域アイデンティティ( $\gamma$ )は、他者とのコミュニケーション的行為の結果として、ある一定水準の共有レベルを保持した、つまり、理解可能性を保持した地域コンセプト( $\theta$ )として形成されるものとした仮定した。これは、同時に主体の認識へと内部化される過程をとる。

以上の仮説を基に、京都市上京区上七軒地区でのアンケート調査を行い、地域アイデンティティ( $\gamma$ )の形成メカニズムを検証した。

#### 4. 地域コンセプト形成モデルに基づく地域住民の地域認識メカニズムの検証

まず、地域住民の地域に対する帰属意識( $\delta$ )の形成状況を明らかにするために、表 1 のように調査項目を設定した。調査対象地区の地域住民がどの程度の空間的範囲を“地域”として認識しているのかを把握するために、5 つの選択肢(居住している町内・翔鸞学区・上京区・京都市・その他)の中から最も妥当だと考えられるものを地域住民に選択してもらった。次に、上京区・翔鸞学区・町内の各地域に対する地域イメージを把握するために、10 対の設問を

用意し評価を行った。また、地域イメージ( $\zeta$ )と同様に、3 つの地域(翔鸞学区・上京区・各町内)それぞれの地域シンボル( $\varepsilon$ )だと認識している“モノ”あるいは“コト”を自由回答で回答してもらった。

これに基づいて、翔鸞学区の地域シンボル( $\varepsilon$ )と、翔鸞学区自体に対する帰属意識を聞き出す設問を用意し、地域住民の回答を得た。調査対象地区での事前ヒアリングに基づいて、翔鸞学区のみを地域( $\eta$ )として設定した。また、コミュニティ研究<sup>3)</sup>等の既存研究の知見も踏まえ、地域住民の認識上の実態として学区を地域単位として設定することの妥当性は確保されているものとした。

表 1 本調査の調査項目一覧

項目	詳細
住民属性	性別・年齢・職業・移住前の居住地・居住年数・住宅形態
地域範囲	被験者の地域範囲認識
地域イメージ評価	「上京区」・「翔鸞学区」・「町内」の各地域に対する地域イメージの4段階評価
地域シンボル	「上京区」・「翔鸞学区」・「町内」の各地域の地域シンボル認識
地域に対する帰属意識	「翔鸞学区」に対する帰属意識の程度
地域シンボルに対する帰属意識	「翔鸞学区」の地域シンボルに対する帰属意識の程度



図 2 : 調査対象地区の範囲

本調査は2004年12月と2006年12月に京都市上京区翔鸞学区の一部地域(柏清盛町・老松町・溝前町全域と佐竹町・風呂屋町・東柳町・末広町の一部地域)を調査対象地区として各世帯に対する調査票の全戸配布によって行った。

本調査の実施にあたっては、翔鸞学区連合自治会ならびに(財)京都市景観・まちづくりセンターの協力を得た。調査全体での回収率は第一次調査が17.8%(142/798)であり、第二次調査が、11.3%(97/855)であった<sup>2</sup>。

### (1) 学区と重なる地域住民の地域認識の範囲

まず本モデルでは地域( $\eta$ )を「翔鸞学区」として設定した。これは、京都市が他地域と比較して相対的に学区制度が強く残っている地域であり、地域住民の諸活動が学区を中心として行われているという現状を踏まえたものである。ただし、あくまでも主体個人にとっての地域認識は、各主体の持つ場所経験を含んだ広義の意味での住民属性に依存している。

表2 地域住民の地域認識

そこで、本調査ではあらかじめ5つの地域を設定し、地域住民に「自分にとっての“地域”を最も適切に表しているもの」について一つの回答を得た。表2に示すように、調査対象地区の地域住民は「学区(翔鸞)」を最も高い割合(38.1%)で認識していることが分かる。

	地域範囲	度数	有効パーセント
有効	住んでいる町内	13	12.4
	<b>学区(翔鸞)</b>	<b>40</b>	<b>38.1</b>
	上京区	25	23.8
	京都市	23	21.9
	その他	4	3.8
	合計	105	100

### (2) 時間軸上の断面相が投影された地域イメージ

地域イメージ( $\zeta$ )とは、主体が持つ客体に対する情報であり、心的に再生された映像である。

出田・石見(1994)は、われわれ人間は「都市を形成する無数の構成要(構成エレメント)の中から、自分の居住地や仕事、好み等の属性に基づいて、ある限られた一部を認知し、認知した構成エレメントに基づいてその都市のイメージを形成している」<sup>4)</sup>と主張している。

出田・石見の主張を踏まえるならば、各主体が同一の空間範囲を認知した場合であっても、各主体の(広義の意味での)住民属性によって、その地域からデコーディングされ、認識される地域イメージ( $\zeta$ )との間には乖離が生じることが推測される。ただし、その個別性を前提としつつも、ある一部の地域空間を射影するものであることもまた事実である。つまり、地域( $\eta$ )と地域イメージ( $\zeta$ )との関係は「 $\eta \cap \zeta$ 」と表現することができる。

地域( $\eta$ )と地域イメージ( $\zeta$ )との間の相関性を検証するために以下の手順で分析を行った(表3)

まず、調査結果に基づいて翔鸞学区に対する地域住民の地域イメージ評価から、因子分析によるバリマックス法を用いた直交回転を行い、9対のイメージを3因子軸に集約・整理した。第一因子は「都会的(0.556)」、「活気がある(0.595)」、「先進的(0.944)」に対する寄与率が高いことから、「都会的なイメージ軸」と名付けた。次に、第2因子は「文化的(0.831)」と「歴史的(0.640)」に対して高い寄与率が見られることから「歴史・文化的イメージ軸」、そして、第3因子は「のどか(0.547)」と「庶民的(0.521)」に対する寄与率が高いことから「叙情的イメージ軸」とした。

次に、因子分析によって得られた因子に対する因子得点を基に直交回転によるクラスター分析を行い、地域住民の地域イメージの認識パターンの類型化を行った(表4)。

表3 回転後の因子行列

	元データ			再調整		
	因子			因子		
	1	2	3	1	2	3
都会的	0.344	0.017	0.115	<b>0.557</b>	0.027	0.186
のどか	0.097	0.213	0.412	0.129	0.284	<b>0.547</b>
おしゃれ	0.416	0.113	0.063	0.726	0.198	0.110
庶民的	0.089	0.125	0.357	0.130	0.182	<b>0.521</b>
活気	0.407	0.074	0.282	<b>0.596</b>	0.108	0.414
開放的	0.383	0.019	0.179	<b>0.587</b>	0.028	0.275
先進的	0.585	0.132	-0.067	<b>0.945</b>	0.213	-0.108
文化的	0.091	0.669	0.157	0.113	<b>0.831</b>	0.195
歴史的	0.101	0.453	0.205	0.143	<b>0.641</b>	0.289

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiserの正規化を伴わないバリマックス法  
a 5回の反復で回転が収束した。

表4 地域イメージの認識パターンと検定値

地域イメージパターン	洗練されたイメージ軸	歴史・文化的イメージ軸	叙情的イメージ軸
「洗練された翔鸞」型	平均値	<b>0.578</b>	-0.501
	度数	62,000	62,000
	標準偏差	0.815	0.685
「素朴で昔ながらな翔鸞」型	平均値	-0.804	0.296
	度数	47,000	47,000
	標準偏差	0.783	0.801
「歴史・伝統が息づく翔鸞」型	平均値	0.075	<b>0.684</b>
	度数	25,000	25,000
	標準偏差	0.497	0.643
合計	平均値	0.000	0.000
	度数	134,000	134,000
	標準偏差	0.973	0.865
	$\chi^2$ 検定		

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearsonの $\chi^2$	17.044008	8	<b>0.030</b>
尤度比	19.16407196	8	0.014
線型と線型による連関	3.433202447	1	0.064
有効なケースの数	121		

a 7セル(46.7%)は期待度数が5未満です。最小期待度数は.38です。

地域住民の地域イメージの<sup>3</sup>認識パターンには、都会的イメージ軸の得点が高く(0.579)、残り2軸の得点が低い「洗練された翔鸞」型、そして都会的イメージ軸の得点が低く(-0.804)、叙情的イメージ軸の得点が高い(0.532)「素朴で昔ながらな翔鸞」型、そして都会的イメージ軸(-1.734)と叙情的イメージ軸(1.439)の得点が低く、歴史・文化的イメージ軸の得点が極めて高い(7.936)「歴史・伝統が息づく翔鸞」型の3つの型があることが明らかになった。

調査対象地区には国宝建造物を含む多くの歴史的建造物が点在している。また、現在でも一般住宅として利用されている京町家や昔ながらの商店街など庶民的な一面も兼ね備えている。加えて、現在では衰退の一途にある西陣織ではあるが、その最盛期(1960年代)には、当該地区はその一大生産地として繁栄していた。

これらのことから、地域イメージ(ζ)は過去(「洗練された翔鸞」型イメージ)と現在の断面相(「素朴で昔ながらな翔鸞」・「歴史・伝統が息づく翔鸞」型イメージ)を明確に反映していると言える。

### (3) 「地域イメージ」を具体化する「地域シンボル」

地域イメージ(ζ)とは「主体の客体に対する情報であり、心的に再生された心象」<sup>5)</sup>である。それが、他者との情報交換過程において具体的な発話によって言語化される。このイメージの形成の基盤となるものが地域シンボル(ε)である。つまり、地域シンボル(ε)とは一定の地域の範囲内で両義的な意味作用を持つ記号として主体に認識されているものであり、言語化された地域イメージ(ζ)を表象するものである。その意味で、地域シンボル(ε)は地域イメージ(ζ)という実態を伴わない言語的存在に実存と収束性を付与する概念である。そこで、以下では地域イメージ(ζ)と地域シンボル(ε)間の相関性を検証した。

表5は、地域住民によって選択された翔鸞学区の地域シンボル(ε)の単純集計を行ったものである。この結果から、調査対象地区の地域住民は「北野天満宮(35.82%)」を最も高い割合で地域シンボル(ε)として認識していることが明らかになった。

表5 地域シンボル(翔鸞学区)の単純集計表

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
その他	7	5.224	5.224	5.224
上七軒	2	1.493	1.493	6.716
西陣織	10	7.463	7.463	14.179
千本釈迦堂	16	11.940	11.940	26.119
北野天満宮	48	35.821	35.821	61.940
無回答	48	35.821	35.821	97.761
翔鸞小学校	3	2.239	2.239	100.000
合計	134	100	100	

表6 地域イメージの認識と地域シンボル選択の相関

		翔鸞学区の地域シンボル					合計
		西陣織	北野天満宮	千本釈迦堂	上七軒	シンボルなし	
地域イメージ パターン	「洗練された翔鸞」型	度数	6	17	4	1	30
		%	10.345	29.310	6.897	1.724	51.724
	「素朴で昔ながらな翔鸞」型	度数	4	20	6	1	31
		%	10	50	15	2.5	22.5
	「歴史・伝統が息づく翔鸞」型	度数		11	6		17
		%		47.826	26.087		26.087
合計		度数	10	48	16	2	76
		%	8.264	39.669	13.223	1.653	37.190

「北野天満宮」は、翔鸞学区内ではあるが、今回の調査対象地区外に位置している。調査対象地区内の中心部に国宝建築物である「大報恩寺(千本釈迦堂)」があるにも関わらず、それとは空間的距離が離れている「北野天満宮」が地域シンボルとして最も高い割合で認識されていた。「洗練された翔鸞」型イメージを有している地域住民の約半数(51.72%)が、翔鸞学区に対して地域シンボル(ε)がないと認識していることが分かった。

地域イメージの認識パターンと地域シンボル選択との相関性は、表6に示すように、「素朴で昔ながらな翔鸞」型イメージを有している地域住民の半数(50%)が「北野天満宮」を地域シンボル(ε)として認識していることが分かった。そして、「歴史・伝統が息づく翔鸞」型イメージを有している地域住民の半数近く(47.83%)も同様に、「北野天満宮」を地域シンボルとして認識していた。「歴史・伝統が息づく翔鸞」型イメージを有している地域住民に関しては、「千本釈迦堂」を2番目の割合で地域シンボルとして認識していたが、これは「イメージなし」と回答している度数と同値である。これによって、モデルのうち、地域シンボルが地域アイデンティティ(γ)として認識される前段階までのプロセスが確認できた。

### (4) 地域シンボルが規定する地域アイデンティティ

地域アイデンティティモデルで提示した構造に基づいて、主体内での地域アイデンティティ(γ)の形成に地域シンボル(ε)が果たす役割を考察している。

(a) 地域シンボル認識が高める地域アイデンティティの強度

まず、独立変数として翔鸞学区に対して地域シンボルを認識している地域住民と認識していない地域住民との2つの変数を設定し、従属変数として地域アイデンティティ( $\gamma$ )の強度を用いたクロス集計ならびに $\chi^2$ 検定を行った。地域住民の地域アイデンティティを測定する指標として以下の調査項目を設定した(表7)。

表7 調査項目表

評価項目	地域帰属意識に関する評価項目
1	地域保全活動への参加度合
2	地域イベントへの参加度合
3	地域に関する情報の認知度合
4	自己概念表現における地域の重要度
5	地域に対する愛着度
6	定住意向
7	地域計画に対する関与意向度合
8	地域防災に対する関与意向度合
9	地域問題に対する事前対処意向度合

表8 地域シンボル認識の有無と地域アイデンティティの強度

翔鸞シンボル認識	シンボルあり	度数	イベント					合計
			わからない	まったくしない	あまりしない	たまにする	必ずする	
翔鸞シンボル認識	シンボルあり	度数	5	19	18	24	11	77
		%	6.5	24.7	23.4	31.2	14.3	100
翔鸞シンボル認識	シンボルなし	度数	1	11	13	12	1	38
		%	2.6	<b>28.9</b>	<b>34.2</b>	31.6	2.6	100
合計	度数	6	30	31	36	12	115	
	%	5.2	26.1	27.0	31.3	10.4	100	

翔鸞シンボル認識	シンボルあり	度数	恋しい					合計
			わからない	まったくない	あまりない	たまにある	とてもある	
翔鸞シンボル認識	シンボルあり	度数	1	16	29	23	5	76
		%	1.3	23.7	38.2	30.3	6.6	100
翔鸞シンボル認識	シンボルなし	度数		5	23	7	3	38
		%		<b>13.2</b>	<b>60.5</b>	18.4	7.9	100
合計	度数	1	23	52	30	8	114	
	%	0.88	20.18	45.61	26.32	7.02	100	

特に地域アイデンティティ( $\gamma$ )のうち、「イベントへの参加度合」と「地域への愛着」において地域シンボルを持っている地域住民に比べて地域シンボルを持っていない地域住民の度数が相対的に低い傾向が見受けられた。なお、統計上の有意性は今回確認することはできなかった(表8)。

(b) 地域アイデンティティの強度に対する住民属性の低い寄与度

地域シンボル( $\epsilon$ )に対する認識のパターンが住民の地域アイデンティティの強度に対して影響を持っていることを部分的に確認することができた。次に、ここでは住民の地域シンボルに対する帰属意識と地域アイデンティティとの全体的な相関性を明らかにするために相関分析(表9)を行った。なお、以下が地域シンボルに対する帰属意識の指標として設定した調査項目である(表10)。

表10 地域シンボルに対する帰属意識評価項目

評価項目
自己表現における地域シンボルの重要度
自己アイデンティティ形成における地域シンボルの重要度
地域における地域シンボルの不可欠性
自己アイデンティティに占める地域シンボルの重要度
地域アイデンティティの危機に対するリスク緩和の有無

表9 地域シンボル魅力と地域アイデンティティの相関

		自分を語る	自分の一部	翔鸞学区	損傷	対処
清掃	Pearsonの相関係数	0.207*	<b>0.277**</b>	0.096	0.025	0.081
	有意確率(片側)	0.017	0.002	0.165	0.400	0.206
	N	106,000	105,000	104,000	104,000	104,000
イベント	Pearsonの相関係数	0.174*	<b>0.246**</b>	0.209*	<b>0.246**</b>	0.094
	有意確率(片側)	0.036	0.005	0.016	0.006	0.171
	N	107,000	106,000	105,000	105,000	105,000
歴史・文化	Pearsonの相関係数	<b>0.382**</b>	<b>0.380**</b>	<b>0.245**</b>	0.095	0.154
	有意確率(片側)	0.000	0.000	0.006	0.169	0.059
	N	106,000	105,000	104,000	104,000	104,000
自分	Pearsonの相関係数	<b>0.441**</b>	<b>0.563**</b>	<b>0.374**</b>	<b>0.246**</b>	<b>0.235**</b>
	有意確率(片側)	0.000	0.000	0.000	0.006	0.008
	N	106,000	105,000	104,000	104,000	104,000
恋しい	Pearsonの相関係数	<b>0.449**</b>	<b>0.521**</b>	<b>0.446**</b>	<b>0.333**</b>	<b>0.378**</b>
	有意確率(片側)	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	N	106,000	105,000	104,000	104,000	104,000
定住意向	Pearsonの相関係数	<b>0.229**</b>	<b>0.307**</b>	<b>0.337**</b>	0.220*	<b>0.237**</b>
	有意確率(片側)	0.009	0.000	0.000	0.012	0.007
	N	106,000	106,000	105,000	105,000	105,000
地域計画	Pearsonの相関係数	<b>0.305**</b>	<b>0.288**</b>	<b>0.186**</b>	<b>0.282**</b>	<b>0.345**</b>
	有意確率(片側)	0.000	0.001	0.020	0.001	0.000
	N	123,000	122,000	121,000	121,000	120,000
火災	Pearsonの相関係数	0.145	0.121	0.155*	0.058	0.059
	有意確率(片側)	0.055	0.092	0.044	0.262	0.260
	N	123,000	122,000	121,000	121,000	121,000
防犯	Pearsonの相関係数	<b>0.252**</b>	<b>0.229**</b>	0.158*	<b>0.230**</b>	<b>0.282**</b>
	有意確率(片側)	0.003	0.006	0.041	0.005	0.001
	N	122,000	122,000	121,000	121,000	120,000

\*\* 相関係数は1%水準で有意(片側)  
\* 相関係数は5%水準で有意(片側)

この結果、地域住民の地域シンボルに対する帰属意識と地域アイデンティティとの間には極めて強い相関関係があることが明らかになった。つまり地域シンボルに対して強い帰属意識を持っている地域住民ほど、地域アイデンティティを強く持つというメカニズムが明らかになった。次に、先に提示した地域シンボルに対する帰属意識を具体的な行為(帰属行為)の伴うものと、地域住民内の意識のみに留まるもの(帰属意識)とに分別し、住民属性を加えた地域アイデンティティ( $\gamma$ )に対する影響を重回帰分析によって明らかにした。帰属行為に関して住民属性は全く地域アイデンティティ( $\gamma$ )の形成に対して影響を与えておらず、地域シンボルに対する帰属行為のみが統計上有意に地域住民の地域アイデンティティに影響を与えていることが明らかになった(表11)。また、帰属行為を除外した変数を従属変数として行った重回帰分析では、地域シンボルに対して強い帰属意識を持っている地域住民で、なおかつ年齢の高い地域住民ほど地域アイデンティティの強度が高いという結果が得られた(表12)。帰属意識の強度と、地域住民の年齢(年齢が高い住民ほど)が地域アイデンティティに影響を与えていることが明らかになった。

表11 地域住民の帰属行為に対する住民の属性とシンボルに対する帰属意識の影響度

モデル	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
(定数)	11.600	1.117		10.390	0.000		
自分の一部	1.219	0.344	0.296	3.541	<b>0.001</b>	0.907	1.103
年齢	0.406	0.220	0.175	1.846	0.067	0.705	1.419
年数	8.42E-03	0.011	0.067	0.732	0.465	0.752	1.329

従属変数:「帰属行為」合計  
調整済みR2値:0.154

表 12 地域住民の帰属意識に対する住民の属性とシンボルに対する帰属意識の影響度

モデル	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
(定数)	1.988	0		5.592	0.000		
自分の一部	1	0.110	0.500	6.747	<b>0.000</b>	0.907	1.103
年齢	0.165	0.07	0.198	2.359	<b>0.020</b>	0.705	1.419
年数	1.28E-04	0.004	0.003	0.035	0.972	0.752	1.329

従属変数:「帰属意識」合計  
調整済みR2値:0.336

(5) 物理的シンボルと心理的近接感の一致によって形成される地域コンセプトの要素

これまでの地域コンセプト形成モデルを通じた分析によって、地域と地域イメージとの間に正の相関性があること、地域イメージという心象を象徴するものとして地域シンボルが認識されていること、特に調査対象地域においては北野天満宮が地域シンボルとして極めて高い支持率によって認識されていたこと、その地域シンボルである北野天満宮に対する帰属意識の強度が地域住民の地域に対する帰属意識の強さに影響を与えていることが明らかになった。そこで、物理的な地域シンボルである北野天満宮と、地域住民が重要視し、帰属している地域の文化との関連性を明らかにするために、地域シンボルと地域住民の重要視している地域文化とのクロス分析及び $\chi^2$ 検定を行った(表 13)。

表 13 地域住民の帰属意識に対する住民の属性とシンボルに対する帰属意識の影響度

	愛着のある地域文化								合計
	ずいき祭	天神さん	翔鷹ふれあいまつり	地藏盆	舞妓・芸妓	西陣織	お茶屋	北野をどり	
北野天満宮	8	56		2	2	2	1	1	72
大報恩寺	2	1				1			4
上七軒歌舞練場							1		1
翔鷹小学校		3		2	2	1			8
一般的家屋						1			1
路地の並び				2					2
京町家や伝統的建造物	1	1		2					4
合計	11	61		4	6	2	5	2	92

	カイ乗検定		
	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ乗	152.1763509	42	<b>0.00</b>
尤度比	62.31631889	42	0.02
線型と線型による連関	5.709954099	1	0.02
有効なケースの数	92		

53セル(94.6%)は期待度数が5未満です。最小期待度は.01です。

この結果、北野天満宮を地域シンボルとして認識している地域住民のほとんどが「ずいき祭り」「天神さん」といういずれも北野天満宮において開催される地域文化に対して愛着を持っていることが明らかとなった。つまり、この地域においては、物理的な象徴性を持つものと心理的な近接感のある地域文化とが極めて高い接着度を持っており、北野天満宮に基づいた統一的な地域コンセプトが形成されていることが明らかになった。

5. 結論

本研究の分析から、まず、地域住民にとっての地域範囲は学区を基礎単位として認識されており、これは既存のコミュニティ社会学等の知見を裏付けるものとなった。また、地域住民の地域に対するイメージはその地域の時間軸上の実態を反映して形成されていることが明らかになった。そして、その地域イメージは具体的なシンボルを介して集約されており、本研究で対象とした上七軒地区においては、重要文化財である北野天満宮が圧倒的に高い割合で地域シンボルとして認識されていることが分かった。特に、当該地域においては国宝である千本釈迦堂(大法恩寺)が立地しているにもかかわらず、地域住民には地域シンボルとしても帰属の対象としても支持度は極めて低かった。このことは、地域シンボルに対する認識が必ずしも空間的近接性に依存しないこと、そして、既存のわが国の文化財保護法の指定による優劣が必ずしも地域住民にとっての価値を左右するものではないことを意味している。

そして、地域住民の地域シンボルに対する帰属意識の強度が地域に対するアイデンティティの強さを規定しており、住民属性による影響はほとんどなかった。つまり、当該地域に対する地域住民の帰属意識の形成のためには地域住民によって共有可能な地域シンボルの形成が重要であり、地域シンボルを保護・継承することによって地域住民の地域アイデンティティを強固に保つことが可能である。最後に、当該地域においては、地域を象徴する物理的シンボルである北野天満宮は、これに関連した地域文化と強い共起構造を持っており、当該地域を表象する地域コンセプトとして統合的に認識されていることが明らかになった。

以上の結果をまとめると、本研究では 1) 提案した地域コンセプト形成モデルの構築と、その検証結果から、本モデルの論理的な妥当性が確認することができたこと、そして、2) 地域住民は、空間から物理的存在を情報として変換することによって意識中に取り込むことで、それを認識・理解し、それに対して帰属意識を形成することによって地域へ

のアイデンティティを形成していること、3)そのアイデンティティが多主体によって共有可能な情報として集約されることで地域コンセプトが形成されること、4)その形成された地域コンセプトを共有する被験者らは、情報として還元される前の物理的なシンボルと、それに付帯する地域文化を共起関係的に認識していることが明らかになった。

最後に、今回調査対象とした上七軒地区では国宝千本釈迦堂は多くの支持を地域住民から得られておらず、コンセプトとして放棄されようとしていることが垣間見えた。予備調査で行ったヒアリング調査から国宝指定にともなって従来まで解放していた門扉が防犯・防火対策として閉鎖されるようになったことで、生活通路として利用できなくなったこと、子どもの遊び場として利用できなくなったことで、千本釈迦堂に対して疎遠感を抱くようになったことを指摘する回答が多く見られた。

国宝千本釈迦堂の保全を考えると、現時点では、被災直後に地域コミュニティを主体にした初期災害対処活動等を実現するための合意形成はなされておらず、千本釈迦堂周辺の地域コミュニティの主体的取り組みによる保全対策の実現は期待できない。また、周辺の再開発を含めた大規模かつ面的な防災ハードシステムの整備を図っていくことは多大なコストがかかる上に、住民のシンボルへの帰属意識の強度からみてもプライオリティも北野天満宮と比べて相対的に低い。

以上のような現状を踏まえるならば、千本釈迦堂については、ハードとして保全することよりも、外観等のテクスチャ情報等をデジタルアーカイブ化させること等で、千本釈迦堂の情報としての復原性を担保することが現実的な対応策の一つとして考えられる。その反面で、これまで文化財保護法下では建造物が損失しているために史跡として扱われているような記念物についても、コンセプトとして継承されていると認められるものについては、優先的な保全対象として保護あるいは再建を進めていくことによって初めて、住民の価値認識に立脚した歴史都市京都の保全政策の展開が期待できるだろう。

## 謝辞：

本研究における二度にわたる調査の実施にあたり、翔鸞学区連合自治会の前会長である長谷川明子氏、翔鸞住民福祉協議会の大串頼長会長、北野上七軒界わいまちづくり委員会、(財)京都市景観・まちづくりセンターのみなさまに多大なるご協力をいただきました。御礼申し上げます。

なお、本研究は立命館大学「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究プロジェクト」、学術フロンティア推進事業「文化遺産を自然災害から防御する学理の構築」研究の一環として行ったものであり、ここに記して感謝申し上げます。

## 7. 参考文献

- 1) 京都市「京都市観光消費経済波及効果」2005年
- 2) Masahiro SHIROTSUKI, Satoshi OTSUKI, Takashi YOSHIMOTO, Hidehiko KANEGAE "A Basic Planning Conditions of Place Image, Identity and Concept", Pacific Regional Science Conference (CD-ROM), PRSCO2005
- 3) 蓮見音彦・奥田道大編『地域社会論』1980年
- 4) 出田肇・石見利勝「都市の構成要素の認知とイメージの関連分析」日本都市計画学会学術研究論文, 1994年
- 5) 城月雅大・大槻知史・吉本宜史・鐘ヶ江秀彦「都市居住者の空間情報受容過程に着目した地域アイデンティティの形成過程に関する基礎的研究」日本地域学会, 2006年9月

## 8. 脚注

- 1 本研究は、計画論的観点から地域住民の地域に対する認知構造を扱ったものであり、したがって、ここで用いる認知モデルは知覚心理学的意味での視覚（色覚・光覚）現象を取り扱ったものではない。
- 2 本調査は、計2回、一次調査、追認調査を行ったものである。モデルの検証にあたっては、第一次調査時のデータを用いた。なお、追認調査の結果もほぼ同様の結果であったため、紙幅の都合上言及は控える。
- 3 本分析のデータは、2006年に行った追認調査の結果を用いた。